

# 袁氏三兄弟と李卓吾

正 田 啓 佑

万曆十八年(1590)、袁氏三兄弟は三人揃って李卓吾を訪れた。時に李卓吾は六十四歳、五年ほど前、黄安から麻城の維摩庵に仮寓していたが、二年前の万曆十六年の秋、竜潭湖畔の芝仏院に移り住んでいた時のことである。なおこの時、一番上の袁宗道は三十一歳、次の袁宏道は二十三歳、そして一番下の袁中道は二十一歳だった。

三兄弟が李卓吾に会った時のことを一番下の袁中道が「柞林紀譚」という一篇に編んで残している。それに次のように言う。

「柞林叟、何許の人なるかを知らず、遍く天下に遊び、郢中(湖北省の江陵・公安の一带)に至る。常に一籃を提げ、酔ふて市上に遊ぶ。語顛狂なるもの多し。庚寅(万曆十八年)の春、村落の野廟に止まる。伯修(袁宗道の子)、時に予を以て寓家に告げて村に入り、共にこれを訪ひ、これを叩くに大奇人なり。再びこれを訪ふに、遂に在る所を知らず。予、髣髴としてその語を次し、以て後

に伝ふ」(「柞林紀譚序」<sup>\*1</sup>)

この文は、陶淵明の「五柳先生伝」の風に倣って書かれており、また終りは淵明の「桃花源記」を模している。この柞林叟とは李卓吾のことであることは、同じく袁中道の「遊居柿録」<sup>\*2</sup> 卷十(154)に、

「昨夜、偶々李龍湖先生<sup>\*3</sup>と共に一堂に話すを夢む。この日、人の伯修(宗道)、中郎(宏道)、予(中道)と龍湖と共に学を論ずるの書一冊を持つ有り。名づけて「柞林紀譚」と為す。すなはち予ら兄弟三人、壬辰<sup>\*4</sup>の歳(癸巳の年の誤り)往きて龍湖に晤<sup>あ</sup>ひ、予、潦草<sup>ろうそう</sup>にこれを記す。

已に帙散じてまた存せず、これ何人の収得せるやを知らず、率爾として流布す。夜来の夢、豈にこの兆ならんや」とあるところから李卓吾であることが知れるのである。

このように袁氏三兄弟は、万曆十八年から三人揃って李卓吾に三回<sup>\*5</sup>会ったと言ひ、その外にも個人的に会つたりなどして、彼等の文学に李卓吾は大きい影響を与えた。この

三兄弟が李卓吾に会ったり、書簡を交わした記録から、換言すれば三兄弟の目を通して李卓吾像を考えてみようというのがこの小論の意図するものである。

(一)

袁氏三兄弟のうち一番上は袁宗道である。袁宗道（嘉靖三十九年1560—万曆二十八年1600）字は伯修、号は石浦。彼の伝記は『明史』卷二百八十八の文苑伝に収められているが、それは弟の袁宏道のつけ足しの形で記載されている短いもの。詳しいのは下の弟の袁中道の書いた「石浦先生伝」（『珂雪齋集』卷十七）である。それによると、宗道が生れる時、祖母の夢に、一人の美人の頭が天から飛んできて、絵に描かれている天人菩薩の飾りのようなものが垂れてきて、それを襟で受けとった。その時夢から覚めたら宗道が生れたという。庚申二月十六日のことであった。彼の幼い頃は慧（聡明）であること甚だしく、十歳にして詩作が出来、十二歳で学校に入り、二十歳で郷試に挙げられたが、先の試験は受けず、故郷で先秦・両漢の書を学んで文章でもって有名になった。それは「弱冠（二十歳）にしてすでに集あり、自ら謂へらく、此の生、当に文章を以て世に名あるべし」とあるような状況で、名が挙がるにつれて文酒の会などに夜を日に継いで出席していたが、一年後、奇病にかか

り、殆んど病死せんとするほどになった。その時道人から数息静坐の法を教えてもらうことで回復し、その養生法を信じるようになり、世間の俗事から離れた生活をする。

万曆十一年、故郷の長者が宗道に、科挙の試験の会試を受けに行けと強く説得したので仕方なく出かけ、黄河のほとりまで来たものの、受ける決心がつかずやめて引き返し、故郷の近くの宿に泊った。その夜、

夜半夢に神人有り、これ（宗道）に語りて曰く「公、速やかに起て！」かくの如きこと三たび、先生醒め、また寝ぬ。神人またこれに語りて曰く「公、何ぞ起たざる吾老人、公の為に特に来たり。何ぞ念ひを見ざるを得んや？」と。微かに杖を以てその足を敲く。足隠隠として痛む。擁せられ、大いに呼ばれて出づ。甫（はじめて）めて（何事かをしたばかりという意）出で屋崩れ、牀碎かれて塵と為る。人これを以て先生の常人に非るを識る。

とあるような異常な体験を通して宗道は、自分の生きる道を翻然と悟り、その結果、丙戌（万曆十四年）遂に会試第一に挙げられ、殿試では二甲第一の成績で進士となった。その時宗道は二十七歳であった。

翰林院に入り庶吉士を授けられたあと、編修となつて官界での道を歩む。そういう中で、当時科挙の殿試第一位（状元）で及第した焦竑や瞿汝稷に師事している。この焦竑こ

そ、生き方は異るとはいえ、李卓吾を理解し、彼の著書の出版にも努力し終生の友であった人である。また李卓吾の高足であつた僧深有（号無念）から、しばしば見性の説というもので啓発されている。「癸巳（万曆二十一年）、黄州の竜潭（李卓吾のもと）、に走<sup>ゆ</sup>き、学を問ふ。帰りてまた自ら研求す」と伝に述べるように、李卓吾の下に学びに出かけたことが出ているが、先に述べたように、万曆十八年にすでに出会いはあつた。宗道は庚子秋（万曆二十八年）ほんのちよつとした病がもとで亡くなつてゐる。享年僅か四十一歳。中道の伝記によると「先生の人と為り平恕にして、またこれを以て人を望まず、且つ自ら多とするなり。興致甚だ高く、白楽天と蘇子瞻（東坡）の人と為りを慕ふ。これ「白蘇」を斎の名と為す所以」という。この宗道が、李卓吾の『蔵書』が刊行された時、「禍是に在り」と言つた。そして後、卓吾は迫害され、書物は禁書となるように的中したが、このような先を見通すような洞察力を示すような事柄は枚挙の暇なしというほどであると述べてゐる。

この袁宗道が、李卓吾についてどのような発言を残しているかを『白蘇斎類集』より拾つてみると、李卓吾の「読書楽」（『焚書』卷六所収）について「読書の楽しみの後に書す」に次のように詩に詠んでゐる。

龍湖の老子の手鉄の如し、

手に信せて駁を許せば写して輟まず。  
縦横円転、古人を軽んず。

と述べて、李卓吾の筆鋒が古人を縦横無尽に鋭く批判することを述べる。その後、卓吾の「読書楽」を手にして、

自ら誇る、書を読めば老いても更に強きを、

胆氣、精神当るべからず。

歌ひ笑ひて情無きも、真の楽しみ有り。

問ふ公、老に垂<sup>なみ</sup>んとして何ぞ飛揚する。

詩既に奇崛にして字の道絶え、

石走巖<sup>しん</sup>、格力蒼たり。

老骨稜稜として精炯炯、

これに対すれば公の傍らに坐するが如し。

龍湖の老子果して希有、

此の詩、此の字、応に朽ちざるべし。

道ふなかれ、世の賞音無きの人、

袁やこれを宝として瓊玖に勝れりとせん。

（『白蘇斎類集』卷一古詩類）

宗道は、卓吾が老いてもなお書を読み、胆氣・精神も人並みでなく、年令を越えた力強さに驚嘆し、従つてその詩も奇抜で優れていることを岩石のゴツゴツとした様に見立て、この詩を読む時は、卓吾の傍に坐つてゐるようだという。この詩、この字こそ不朽のものだと賛嘆して、世の中

の風流を理解せぬ者は批判するなど言い、この「読書集」

は瓊玖（美しい宝石）よりも優れた宝として絶賛している。

李卓吾の詩について、宗道は手紙の中で次のように言う、

また近ごろの詩を読むを得たり。「白尽余生髮、单存不

老心、遠夢悲風送、秋懷落木吟」に至りて、我をして婆

娑として（身をひるがえして）起ちて舞ひ、泣なみだ数行下

る。近ごろ作れるものの妙なる、此に至れるか

と述べている。この詩は『焚書』（巻六、五言八句の「秋懷」）

に収められており、ただし中の四句が省略されている。全

文を掲げると、

白は余生の髮を尽すも、

単へに存す不老心。

栖栖として楚を学ぶに非ざるも、

切切として交わりの深きを為す。

遠く夢む、悲風の送らるるを。

秋に懐ふ、落木の吟ずるを。

古来、聡聴の者、或は別に知音有らん。

この手紙には、李卓吾のもとに沁水父子（劉晋川・肖川）、

焦弱侯、陶石簣らの講友が集まり、学問上講求しては裨益

するものが多かったと想像されるが、宗道は郷里に帰って

いてそれに加われなかった事を益友を失うと述べて残念に

思っている。ここに卓吾を慕う講友集団が垣間見られ、そ

れだけでなく蕭玄圃、黄慎軒、顧開雍らの諸公は書簡でも  
つて学問を論じていることも述べている。

宗道が李卓吾に宛た書簡は『白蘇齋類集』に四通収めら

れていて、ここに掲げたものの他三通あるが、卓吾を彷彿

させるものではない。宗道は卓吾の「四書義」数十首のう

ち、『孟子』（公孫丑上）にある「言に得ざれば心に求むる勿

れ、は不可なり」という文を最も好んだ（『読孟子』）と述べ

る。また同書の巻二十二の雑説類には、李卓吾の『龍溪語

録』に序した言葉を収めている。その内容は陽明後学の学

問の系譜を述べたもので、『焚書』巻二にある「黄安二上人

の為に」の第一書の内容と酷似したものであるが、『龍谿先

生文録抄序』の文とは異なるものであり、この袁宗道が抄

出した文は『焚書』にも『続焚書』にも収められていない。

宗道は雑説類の中の「雑説」に、卓吾の書簡（『答周西巖』

の「天下第一人として生知ならざるはなし」と述べる『焚書』

巻一の冒頭の文と「答鄧石陽書」の「穿衣喫飯、即ちこれ

人倫物理」という『焚書』巻一の四番目のもの）二通と「四

勿説」（『焚書』巻三所収）及び「童心説」（同）の二文を取

り上げて収録している。ここに宗道の卓吾の思想中の興味

を引くものが何であるかが推測できるのであり、また当時、

卓吾の特徴として問題となっていたものと言えようか。

(二)

次に袁氏兄弟のうち最も有名な袁宏道についてみてみる。宏道についても弟の中道の書いた「吏部驗封司郎中中郎先生行状」(『珂雪齋集』卷十八所収)に詳しい伝記がある。勿論『明史』(卷二百八十八)の文苑伝にも伝が三袁の代表として載せられているが、それは正史のものであるだけに公的経歴であるので、中道の私的エピソードをまじえた行状の方がその人と為りを知るには都合がよいので、中道の行状を中心に他のものも合せて述べることにする。

袁宏道(隆慶二年<sup>1568</sup>—万曆三十八年<sup>1610</sup>)、字は中郎、号は石公。生れるに当って太母が夢に月を懐に入れたところで生れたので、小字を月と言った。子供の時は、実際の年令の倍の年のことを理解した。四歳の時、新しい履き物をはいた時、母方の祖父龔孝廉が「足の下に雲が生じている」と言ったところ、宏道は即座に「頭上に天を頂いている」と答えて驚かしたという。総角(あげまき、つまり元服前)の時、すでに八股文を作るのが巧みで、塾の教師は舌を巻いたという。郷校に入った十五、六歳の時、詩文を作る結社を作って年上の人をも指導したという。万曆十六年、郷試に及第した。時に二十一歳。しかし次の年、会試に落第している。万曆十八年、本論の最初に述べたように李卓吾

に会った時のことを次のように述べている。

先生(宏道)既に龍湖を見、始めて一向に陳言を掇拾し、俗見を株守し、古人の語の下に死して、一段の精光も披露し得ざることを知る。(『吏部驗封司郎中中郎先生行状』)

つまり宏道は李卓吾に会って、今迄の自分のやってきた事が、昔の人の言い古された言葉を拾い集め、俗な見解に固執して、本当の光り輝くものがないことを悟ったため、自分の考え方を改めて新たな展開をさせたことを続けて次のように述べている。

ここに至りて浩浩焉として鴻毛の順風に遇ひ、巨魚の大壑に縦ままするが如し。能く心の師と為りて、心を師とせず、能く古人を転じて古人に転ぜられず、発して語言と為り、一一胸襟より流出す。天を蓋ひ地を蓋ひ、象の急流を截ち、雷の蟄戸を開き、浸浸乎として其の未だ涯有らざるが如し。(同前)

このように卓吾の宏道に対する影響は大きいものがあつた。万曆二十年、二十五歳で会試に及第したが、仕えずに兄の宗道と故郷に帰り、後また兄宗道、弟中道と龍湖に来て李卓吾に会っている。その時卓吾は、「伯(伯修つまり宗道)や穩実、仲(中郎つまり宏道)や英特、皆天下の名士なり」と評し、宏道に対しては、「識力胆力、皆世に迥絶す。真の

英霊男子にして、以て此の一事を担荷すべし」と大変な期待を寄せている。

万曆二十三年、呉県の令となって赴任し、ここではじめて官界に入ることになり、後に宏道の学は変つていき、卓吾の考えには穩実に欠けるものがあると感じるようになる。万曆二十七年に国子監助教となり、ついで礼部儀制主事、以後仕官の意志なく、辞職したり、また復職したりの繰返しの中で、万曆三十八年九月六日、吏部稽勲郎中で病没した。享年四十三。これまでの間、弟の中道は科挙に何度も落第して合格しなかつたので、宏道はずっと弟の面倒を見てきていて、中道は兄宏道に従っていたので「先生（宏道）南北に宦遊し、中道皆これに依り、形影離れざるが如し」という有様で、その為、宏道が病になるや、即日神に祈り、身代りになりたいと願つたが、それもかなわず宏道は死へ旅立つたのであった。

袁宏道が李卓吾に書き贈つた最初の詩は、万曆十八年、兄弟三人ではじめて卓吾に会つたその後、卓吾から手紙を貰つたことに対して作つた詩で「李宏甫先生の書を得」というもので次のように詠じている。

此くの似き瑶華の色、

何ぞ空谷の音に殊ならん。

悲しいかな撃筑の涙、

已んぬるかな唾壺の心。

跡、豈に焚書の白すのみならんや、

病は老苦の侵すに因る。

文有れば焉んぞ隠るるを用ひん、

水無きに若為か沈まんや。（「敝篋集」卷之一）

卓吾が自分の真意を理解してくれないこと、そのためこの年に刊行した『焚書』<sup>\*11</sup>は焚き捨てられるべき書の名を持ち、それを嘆いたのに対する宏道の思いを詠んだのがこの詩で、昔の高漸離が撃つた筑や、王敦が痰壺を打つた気持を分るような人はいないかもしれないが、『焚書』で明らかにしただけのことではないはず、従つて先生はこの世を諦らめて隠遁すべきではない、自分のような理解者も在るのだと述べているので、ここに卓吾の世の中に対する消極的、隠遁的である面を否定することから、逆に卓吾の態度を想像することができる。

万曆二十年に焦竑<sup>\*12</sup>が朝廷の命を受けて大梁に使いし、ついでに楚に行つて李卓吾を訪問するというのを送る詩がある。それに

蓮開き白社に陶令来たり、

瓜熟して青門に故侯に謁す。

という。蓮の花の咲いた洛陽の近くに陶淵明が来るような、また長安城の東門に漢の邵平が植えた瓜が熟する処で拝謁

するように、焦先生は李宏甫（卓吾）先生に会いに行かれるが、この二人に師事して宏道は弟子となつてゐるということ。「自ら笑ふ両家（卓吾と焦弱侯）の弟子と為るを」と詠じ、卓吾を仙舟に臨むと言つてゐるように、隠遁した人と見てゐる。

翌万曆二十一年には、卓吾を懐かしんで「龍湖を懐しむ」という詩がある。その中に、

老子もとより龍を將つて性と作し、  
楚人もとより鳳を以て歌を為す。

と述べて、孔子が老子のことを「吾、今日老子を見るに、それ猶ほ龍のごときか」（『史記』老子列伝）といふのと、楚の狂接輿、歌ひて孔子を過ぎて曰く、「鳳や鳳や、何ぞ徳の衰へたる」（『論語』微子）をふまえているが、この両者を李卓吾になぞらへてゐる。つまり宏道は卓吾を老子や狂接輿的な隠者と見做してゐるわけである。

同じ万曆二十一年、麻城に李卓吾を訪れた袁宏道は、卓吾への別れの詩を八首書き、卓吾もそれに応じて五言絶句を八首詠じた。その応答を上下に対照すると、

袁宏道（其一）

李卓吾（其二）

十日、軽々しく別れを為し、  
会ふは別れを成さざるなく、  
重ねて来るも未だ期有らず。  
若し来たらば還また期有らん。

門を出れば余は涙の眼、  
終に是れ男児たらず

〃（其二）

惜別は今朝に在り、  
車馬の去ること遥遥たり。  
一たび行きて一たび首を回らし、  
踟蹰して板橋を過ぐ。

我に解脱の法有り、  
涙を灑いで君が詩を読まん。

〃（其五）

別れは今朝を説はず、  
去るも遥遥を説はず。  
路に履を進むる者に逢へば、  
定めて圯橋を過ぎしを知らん。

（中略）

袁宏道（其六）

李卓吾（其一）

兄弟知己と為り、  
同袍比隣のごとし。  
門を出でて去るもまた易し、  
只だ愁ふ君の一身。

〃（其七）

門に入りて兄弟と為り、  
門を出づれば比隣の若し。  
猶然として幽谷に下りて、  
来り問はば幾んど死せし人ならん。

〃（其八）

死を去るも何ぞ恨みん、  
『藏書』大いに名を得。  
紛紛たる薄俗の子、  
相激して転た相成らん

多少なるや無名の死、  
予は特だ死して声有らん。  
祇だ愁ふ薄俗の子  
我の名を成さざるを誤らん。

〃 (其八)

君が意は書に在らず、  
書を著はすは、誰が子の為なるや。

平生書を著はすに懶うし  
書成るはまた予を快くす。

安んぞ東南の風を得て、

驚風日夜吼え、

君の湖水を渡るを吹け。

随处、安居とするに足る。

〃 (其七)

こう詠じているのを見ると宏道が感傷的に詠んでいるの  
対し、卓吾は人生を達観して、少々皮肉っぽく見える。こ  
れは当時宏道が二十六歳なのに対し、卓吾は六十七歳とい  
う、当時の人の寿命からするともう生を終える年というよ  
うな、つまり年の功より来たものと彼の人生観の表われで  
あろうと思える。

同じ年、宏道には次のようなものもある。「余、凡そ両  
度、雨に冲霄観を阻まれ、俱に龍湖師を訪れしが為なり。

戯れに壁上に題す」とある二首のうちの其二に

我観裏に従ひて青牛を拝み、

忽ち龍湖の老比丘を憶ふ。

李贄はすなわち今の李耳為るのみ、

西陵還た古の西周に似たり。

これは宏道が李贄を訪問しての帰り道、江陵を通った時、  
雨に降られた為、独陽荘にある冲霄観を訪れ、その道観の  
中で老子の乗ったという青い牛の像を拝んだ。その時ふと

龍湖に住んでいる李卓吾のことを思い出し、李贄こそは現  
代の老子(「老子」の著者とされる李耳)だと思い、そう  
なると李贄の住む西陵の地は古の西周に似ていると思いつ  
たというのである。このように宏道にとっては李卓吾は老  
子であり、道教の徒の隠者という印象なのである。

宏道は万曆二十二年、二十七歳の時、呉県の知県に任せ  
られ、翌年三月任地に赴いたのであるが、呉には一人も話  
合うべき人もいないと李卓吾にこぼしている。その手紙  
に、

呉の令と作るはまた頗る簡易なり。ただ奔走するも奈何  
とするなきのみ。家弟(中道)、梅大巡撫(梅国楨)の為  
に接し去き、兩人甚だ相懼ぶを聞く。弟の来書に云ふ、

「数日ならずして呉に至るべし。首を転ぜば、即ち湖上  
に至らん」と。呉中の一人の語る無きも、幸に床頭に『焚  
書』の一部有り。愁は以て顔を破るべく、病は以て脾を  
健やかにすべく、昏を以て眼を醒ますべく、甚だしく力  
を得。便有らば佳示を惜しむなかれ。

と述べる。呉県の知県となって赴任した宏道にとって慰め  
となるものは卓吾の著『焚書』であり、この一書が愁も悲  
しみも、病をも解決する力を持つ特効薬だったのである。

李卓吾は万曆二十四年の秋、巡道史の某より「李卓吾去  
りしや否や、此の人大いに風化を壊つ。若し去らざれば、



当に法を以てこれを治めん」(『統焚書』卷一「答来書」と言われて、麻城を追われ沁水に行っている。そのことを袁宏道は梅客生(梅国楨)への手紙に「卓老(卓吾)、一袈裟の地も意に有する能はず。天下の事、安くんぞ理を以て論ぜざるを得んや」と述べている。卓吾が一枚の袈裟の地、つまりほんの僅かの身の置く処も得られず追い出されることを述べる中に、政治(官僚)の酷薄さを述べているのである。この手紙の前半は、袁宏道の当時の官僚批判であり、政治批判であり、なかなか見所のあるもので、この考えは李贄の思想のそれと一致するものなので掲げると、

既にしてこれを思ふに、知県は賤にして卑しく、これを捨つるは甚だ易きも、開府(巡撫や総督を指す)は貴にして尊く、これを捨つるは難し。知県は捨つべきも、開府は捨つべからざるなり。何ぞや、開府は簿書牛馬の累なし。終日堂皇に高坐して、その腰を折り跪拝する者皆金紫なり。すでにして飲酒を妨げず、好色を妨げず、また参禅も妨げざるなり。開府の官、漸く大に、位漸く高く、三年にして一蔭(父祖の官位による特典)、六年にして二蔭、若し二十年を作さば、すなはち奕世(累代にわたり)蟬聯(継続)せん。三者皆高名厚利にして捨つべからざるの実なり。この三を操りて捨て得ず。而れども梅公必ず捨てんと欲す。

と述べて梅国楨の無欲ぶりを述べる中に、官僚が欲望の為に高官を望むのを批判するのは李卓吾の主張であり、宏道は卓吾から影響を大いに受けての主張であることは当然である。

李卓吾は蘇東坡の弟蘇轍の老子の解釈を高く評価して「子由解老序」を書き、「時に子由が『老子解』を獲てこれを読む。老子を解する者衆し。而して子由(蘇轍の字)を最と称す」と述べているが、子由の兄蘇軾(字子瞻。号東坡)の詩文も高く評価している。『焚書』に「蘇長公とは何如なる人なるや、故にその文章、自然驚天動地、世人は知らず、ただ文章を以てこれを称さる。知らず、文章はただ余事のみ」(卷二)とあり、また『統焚書』(卷一)には、「李卓吾が『坡仙集』、我に批削旁註、内に在る有り」(与袁石浦)とあって、李卓吾が蘇東坡の詩文の撰集を作ったことが分る。この蘇東坡の文について、袁宏道が卓吾へ送った書簡の中で論じている。

袁小修の帖来り。翁(李卓吾)の棲霞(南京にある山)に在るを知る。彼の中、何の人士か与に語るべき者有らんか。生(私)此に在り、甚だ間適、一意書を観るを得、学中また廿一史及び古の名人集の読むべきもの有り。窮官、書を借るを須ひず。尤も是れ快事なり。近日最も意を得しは、歐・蘇の二公の文集に批点するに如くはなし。

歐公の文の佳なること論なし。……蘇公の詩は高古にして、老杜に如かざるも、超脱変怪これに過ぐ。天地有りてよりこのかた一人のみ。僕かつて六朝に詩なく、陶公に詩趣有り、謝公に詩料有り。余子は碌碌として観るに足る者なし。李・杜に至りて詩道始めて大なり。韓・柳・元・白・欧は詩の聖なり。蘇は詩の神なり。彼謂ふ、宋は唐に如かざるは、觀場の見（高樓から見ているようなもの）のみ。豈にただ真に詩の何物なるかを知らんや。

（「与李龍湖」『袁宏道集箋校』卷二十一）

袁宏道は、自分の歐陽脩や蘇東坡の詩文に対する考えが、李贄のそれと同じであることを予想し、師に対し同意を求めての書簡を送ったのである。李卓吾も勿論同じ様な考えであることは間違いないのである。なお蘇東坡と李卓吾を比較して、そこに共通性を見出して論じているのは宏道の弟、袁中道であり、それについては後述する。

### （三）

袁氏三兄弟のうち一番下の中道は、上の二人の兄のように科挙に若くして合格できず、それかとして諦めもせず、二十余年もの間、受験勉強に涙ぐましい努力をしている。その結果、万曆四十四年にやっと及第して進士となった。時に四十六歳であった。『珂雪齋集』（下）に収める「珂雪齋遊

居柿録」は万曆三十六年（1608）から四十六年までの日記であるが、万曆四十四年の二月の所に、受験と合格までの経緯が書かれている。この科挙及第への執着ぶりに対し、彼が師と仰ぐ李卓吾は、郷試に合格して挙人となった後は、試験を受けに行く道のりが遠いからという口実でもって進士への道を断念している。こういう生き方と中道のそれとは対照的であるが、その中道が李卓吾の伝記である「李温陵伝」（『珂雪齋集』卷十七、所収）を残したのだから面白い。

袁中道は（隆慶四年1570—天啓二年1623）、字は小修。上の二人の兄がそれぞれ四十一歳、四十三歳で亡くなったのに対し、五十四歳で最も長命であったわけだが、当時としても必ずしも長命とは思われない。袁氏は短命の家系であったのか、兄の子にしろ、中道の子にしろ夭逝していることから推測される。それはともかくとして、三兄弟のうち最も長命であっただけに残した作品も一番多い。<sup>\*20</sup>

袁中道の伝記には錢謙益（号牧齋）の書いた「袁小修伝」があり、<sup>\*21</sup>『公安県志』に採られており、その他『明史』（卷二八八）に袁宏道の後に付載されている。それらを付き合せて述べると、

小修、十歳にして黄山雪二賦を著す。凡そ五千余言なり。長じて輕俠に通じ、酒と人とに遊び、豪傑を以て自

ら命く。(中略)舟を西陵に泛べ、馬を塞上に走らせ、燕趙齊魯呉越の地を窮覽し、足跡は幾んど天下に半ばす。而して詩文もまた日を以て進み、歸りて李龍湖(卓吾)に学ぶ。

そしていつも「兩兄に従つて京師に宦遊し、多く四方の名士と交わり、万曆三十一年、始めて郷(試)に挙げられ」(『明史』)ようやく

万曆丙辰(四十四年)始めて進士に挙げられ、徽州府の教授に改められ、国子博士に遷り、南せんことを乞ふて礼部儀制を得、南部吏文選司郎中を歴し、天啓四年、南京吏部郎中、官に卒す。

という経歴である。李卓吾との出会いは、二人の兄について万曆十八年を最初として会うが、中道が科挙の勉強中に卓吾は亡くなっているわけである。しかし兄達とともに卓吾の下に出入りし、接する機会をもったことで、別れの詩や思い出の詩、そして交わした書簡を残している。そしてその内容は兄達が卓吾とかわしたものと酷似しているのである。「李龍湖<sup>\*22</sup>に寄す」には、「中道は楚の腐儒なり」とあった後(中略)「先生は今の李耳なり。相去ること遙に非ず」とあり、これは宏道の所にもあったのと同じであり、また李卓吾を蘇東坡と比べたものには次のようながある。

昔、蘇子瞻の人と為り、性伎害<sup>しがい</sup>なし。道を楽しんで人善く、

宜しく世に軋ること無し。而して当時のこれを悪む者、ただ心を甘しとするが若くして罪無し。(中略)禍を致す所以を訊ぬるに、多くは解すべからず。豈にまた命數<sup>たま</sup>適々これと会へりしか、龍湖先生は今の子瞻なり。才と趣と子瞻に及ばず。而れども識力・胆力、ただこれに過ぐるのみならず、その性、伎害する処なし。大約、子瞻と等し。而して禍を得るもまた依稀として相似たり。或は云ふ。二公の舌端・筆端、真に以て世の大いに忌むことに触るる者有り。然るか否か、

この後に、蘇東坡が迫害され、左遷され、書物が禁書になつたりしたのも、李卓吾と同じであり、後、宣和の世になつて蘇東坡の文の禁書が弛くなつたのも李卓吾と同じだと言う。

然る後、始めて蘇文の禁を弛めらる。龍湖逮われし後に当り、稍稍<sup>や</sup>その書を禁錮され、数年ならずして盛んに世に伝はり、日月を掲げて行くが如きは、則ち本朝の寛大と、士大夫の淳厚と、その宋朝に過ぐるやまた遠し。

(『龍湖遺墨小序』<sup>\*23</sup>)

袁中道は宏道の任地についてまわりながら、受験勉強をしていたため、いつも行動を共にしていたので、考え方も宏道から強く影響を受けていたことは否めない事実であり、従つて卓吾は現代の蘇東坡であるという考えも、宏道の東

坡評価と一致しており、その考えをもつと強く推進しているのである。

さてこの文で一つ注目すべきことがある。それは、李卓吾の著書が禁書の憂き日に遭いながら、その状況がいかなるものであったかを考える一つの材料のように思える。明の朝廷から禁書の処分が出たからには、相当厳しい弾圧があったであろうと想像していたが、この夏道甫のように、師の詩文や尺牘を集め、所持し、この禁書の政策が緩和されてきた時、それを刊行しようということがこのような形でなされていたからこそ、今日、禁書にされた割には李卓吾の書がいろいろな形で出版されて、我が国へも将来されたことが理解できるのである。その上、明末、この天啓年間、清朝から攻められ、朝王朝崩壊寸前であったので、出版の禁止云云を問題にする暇がなかったことも緩和の状況を助長させたはずである。

最後に、李卓吾と終生交らぬ友情を抱き続け、そして卓吾を見守り、卓吾の書※24の出版に努力した焦竑が、袁中道を招いて学問を論じた文が残っている。これを通じて李卓吾像がまた一つ描けると思うのでそれを掲げよう。

焦先生の招きに赴き、因りて学の次（順序）を論ず。予、先生に問ふて曰く「李卓吾の如き者は先生能く其れ此の大事を了し信ずるや否や」と。先生曰く「是れ知る所に

非ざるなり。然れどもその（卓吾）見地もまた甚だ高し。乃ち世の学者、これを魔に比するは則ち過りなり。卓吾初め南部（南京）に官す。予が友人予に謂ひて曰く、「李某（卓吾のこと）却つて仙風道骨有り。此くの如き人、道に入るを得ば、進むこと未だ量るべからず」と。後にその人を見るに果して然り。久しくして乃ち学に向ふ。毎に聚会の中、嘿として一言も無く、沈思するのみ。此くの如きこと数年、談鋒始めて発す。然れども時時疑ひ有り。楚（黄安や麻城）に至るに及んで、書の来る有りて曰く「今の卓吾は昔の卓吾に非ざるなり。若し昔の卓吾の如ければ、また何ぞ卓吾を貴ばんや」と。その自ら任ずること此くの如しと。（『珂雪齋遊居柿録』卷三・42）

焦竑に招かれて袁中道が李卓吾に質問したのに対して、（この時は万曆三十七年で、卓吾が自害して七年後のことである）焦竑は旧友を思い出して語っているのである。そして卓吾の人間の測り知れない大きさを感じていたので、自分の理解できないところであると言い、しかし卓吾の考え方は非常に高いものがあると説くのである。そして世の中の学問をする人が、卓吾を魔物か何かのように畏れ憎んで排斥し、追放したことは誤りであると言い、昔の友人の言葉を引きあいに出して卓吾の人となりや仙風道骨ある人間だ、これはこれまでに述べた中の老子に擬したのと同じことで

うと試みたのである。

註

- \* 1 『李温陵外記』卷二所収。『珂雪齋集』(下) 上海古籍出版社刊の附録にも収めている。
- \* 2 前掲の「珂雪齋集」(下) に収めている。
- \* 3 李龍湖は李贄、字は宏甫、卓吾は号、他に温陵居士、龍湖等、多くの別号がある。龍湖は竜潭と同じで、麻城の近くにあった湖、李卓吾に住んだ芝仏院がそのほとりに在ったので、李卓吾のことを李龍湖とも言う。
- \* 4 林海樞氏は『李贄年譜考略』(1992年、福建人民出版社) P222で癸巳の年の誤りとするのに従う。
- \* 5 『袁宏道集箋校』(上) (1981年、上海古籍出版社) P75に、錢伯城の箋注にある。
- \* 6 錢伯城標点、1989年刊、上海古籍出版社刊による。
- \* 7 これらは全て『李温陵外記』にも収められている。
- \* 8 『白蘇齋類集』卷十九、説書類。
- \* 9 林其賢氏は「李卓吾著述考」(『李卓吾事蹟繫年』1988年文津出版社刊)で、『龍溪先生文録』八巻を掲げた中で、本書は『龍溪語録』、『龍溪先生語録』或は『龍溪語録抄』、『龍溪先生語録抄』と題するが、皆同じものとする。ただここで注意すべきは、『焚書』卷三所収の「龍谿先生文録抄序」とこの書簡の引くものとは異なるものであること、まだ未調査だが、京都大学文学部蔵の『卓吾先生批評龍溪王先生語録鈔』八巻(万曆26序刊本)の序が、どちらのものであるか調べてみる必要があることをここに指摘しておきたい。

あるが——そして卓吾が道を学び体得すれば、その人格は量り知れないものがあると言っていたのは本当だったとエピソードを披露し、焦竑もそう考えているのである。そして卓吾の学問への態度を、默然として一言も発せず、沈思するだけだったが、そのような生活を数年する中で、新しい展開をはじめ、それに伴って談論も鋭くなり、官を辞して黄安や麻城に移り住むようになって、卓吾は新しい行き方を展開していった。そのことを表わす手紙がある。それに「今の卓吾(自分)は昔の卓吾ではない。もし昔の卓吾のままであったなら、どうして人が貴んでくれようか」と書いてあったという。つまり毎日毎日、今の自分を乗り越え、新しい自分を造っていくことが求められ、それを自ら任じていたのである。日々維れ新たに自分を発展させていこうというので、過去のぬるま湯に漬って安住する世界ではないのである。こういう態度が時代を先どりし、先端を走る卓吾を作ったのである。これは同じ時代に生きた官僚思想家呂坤が、自分を新たにするため、号を新吾(吾を新にす)とつけたのと一脈通じるものがあり、明末の頹廢した世の中から、新しい時代を到来させる力を生み出す一つの力の表われのようでもある。

ともあれ袁氏三兄弟を通じて、彼らの目やそれを取り巻く人々の言葉を通して、李卓吾像を少しでも明らかにしよ

- \* 10 『袁宏道集箋校』(上)(上海古籍出版社)P 25。入矢義高注『袁宏道』(『中国詩人選集』第二集11)P 91-94。
- \* 11 『焚書』の李卓吾の自序によると「余、年六十四矣」とあって、この年に刊行したのであるが、今日の『焚書』にはこの年以後の文も収められているので、後に補われて刊行されたのは確かである。しかし最初のもものはこの年刊行され、袁宏道も一部持ち(持っていたことが後の詩にもあり)それを読んだ印象なのである。
- \* 12 容肇祖「焦竑及其思想」の万曆二十年の条には、大梁への使が終った後、故郷に帰ってから都に戻ったとあるが、李卓吾のところを訪れたとはない。(容肇祖集「齋魯書社刊」P 409)李卓吾の所を訪れる予定であったのであろう。
- \* 13 当時弟の中道は科挙の試験に失敗して大同の巡撫梅国楨の食客となっていた。そしてこの年の九月に兄の居る呉県に来ていた。(箋注による)
- \* 14 『統焚書』巻一の「与城老」にも李卓吾に対する地方官の迫害が述べられている。
- \* 15 『袁宏道集箋校』(上)P 484-485。
- \* 16 『焚書』巻一の「答耿司寇」や「答鄧明府」等に見られる。
- \* 17 林海権は『李贄年譜考略』の「李贄の著作及評点・輯選諸書目録」に、『老子解』三卷、宋蘇軾撰、明李贄輯、万曆九年刊、とあり、別に『老子解』二卷、李贄著というのも挙げられている。林其賢の『李卓吾事蹟繫年』の「李卓吾著述考」には『老子解』二卷、明万曆四十三年、亦政堂重刊とある。京都大人文研の目録などは二巻とする。この序は『焚書』巻三所収。
- \* 18 『焚書』巻二の「復焦弱侯」に収められているが、この部分は、『李温陵集』より補った増補の部分にも、殆んど同文がある。
- \* 19 『坡仙集』十六卷、宋蘇軾著、明李贄選批。明万曆二十八年、繼志齋焦竑刊本。(林海権、前掲書による)。林其賢氏は前掲書で、万曆十七年前後に編撰されたものとしている。内閣文庫所蔵は明刊とする。
- \* 20 今日出版されているもので見ても、袁宗道の『白蘇齋類集』(上海古籍出版社、1989年刊)は二十二巻とするが、三百二十一頁のもの一冊。袁宏道の『袁宏道集箋校』(上海古籍出版社、1981年刊)は全五十五巻、三冊で本文千六百四十八頁あるが、箋注と校記を除くと四分の一ぐらいは減る。そうなると中道の『珂雪齋集』(上海古籍出版社、1998年刊)は全四十巻(正文三十八巻、附録二巻)三冊、千四百八十九頁は校注などないので、宏道のものより恐らく多いであろう。
- \* 21 『珂雪齋近集』(上海書店重印)の冒頭に「公安県志」から引かれて収められている。
- \* 22 『珂雪齋集』(中)巻二十三、前掲書、P 921。
- \* 23 同右書、(上)巻十、P 474。この遺墨をはじめ数多くの書簡などを夏道甫が所持していて、刊行に努力したことは、『珂雪齋遊居柿録』巻一、14、15、巻七、25などに散見する。
- \* 24 『焚書』の序ばかりでなく、『藏書』や、卓吾の死後に出版された『統焚書』にも序している。